12 滋賀県大生 移住体験記

地方活性化で全国的に有名になった岡山県西粟倉村では、廃校になった小学校にローカルベンチャー（地域資源を生かしたビジネス）を志す若者が全国から集まっています。多くの人が何とも思わないことでも、ある人にとってはかけがえのない魅力にもチャンスにもなる。その“運命のひとり”が岩屋のどこに惹かれるかは、岩屋に住む人にはかえって気づきにくいのかも知れません。

そう考えると、外向けに背伸びした発信をするよりも、与謝野の日常をありのままに切り取って発信し続けることが、“運命のひとり”をいざなう一番の近道ではないか、そんなふうに思えてきたのです。

与謝野には、「うちのまち」があります。みなさんの暮らしをありのままに映し出しています。役場の松本さんのお話では、与謝野町の地域振興もはじめは、どちらかというと外向けの魅力発信に力を入れていたそうです。“運命のひとり”にもっともっと与謝野の魅力を届けたい。それには、地域で暮らす自分たちが地域の良さを知らないと始まらないと気づき、かべ新聞、「うちのまち」が誕生したそうです。外向きではなく地域のみなさんに与謝野の魅力を伝える「うちのまち」。岩屋での移住体験を終え、いま私たちは「うちのまち」が移住促進の切り札になるのではないかと考えています。移住に憧れるひとは知らず知らずに住んだ後のことをイメージするといいます。そういった意味でも、与謝野で暮らすみなさんに与謝野の魅力を伝える「うちのまち」は、移住に憧れる未来の住民、“運命のひとり”の心をつかむはずです。無関心な大多数ではなく、関心のある少数をターゲットにするやり方をロングテール戦略と言うそうです。ただ、自治体は公共性が求められるので、ロングテール戦略を取るのは苦手です。しかし、「うちのまち」はそれが既にできています。これは、制作を民間新聞社に委託していることと、自身も移住を考えている駐在員が記事を書いているからだと思います。

最後に、私たちから小さな提案をひとつさせてください。「うちのまち」を、紙で町内に配布するだけではなく、移住に憧れる“運命のひとり”の目に止まるよう、役場のホームページで見やすく掲載してもらえないでしょうか。「移住者のモデル的な暮らし」を考え続け時間が過ぎるより、与謝野の日常をとにかくたくさん切り取って発信する、そんな移住促進をやってもらえませんか。そして私たちにも、好きになった与謝野に“運命のひとり”をいざなうお手伝いをさせてください。

中野 はるな

うちのまち 特別編

編　中野はるな（滋賀県立大学 環境科学部 環境政策・計画学科）

著 中野はるな、内堀桜花、辻真奈、牧野史奈（同上）

監修　瀧健太郎（同上 准教授）

指導・協力　安部拓輝（毎日新聞社），与謝野町岩屋区のみなさん，岩屋区移住定住促進委員会

2018年12月25日 発行

1 滋賀県大生 移住体験記

私たちはびわ湖のほとり滋賀県立大学に通う学生です（中野はるな＝3 回生、内堀桜花＝2 回生、牧野史奈＝2 回生、辻真奈＝2 回生）。環境科学部 環境政策・計画学科というところに所属していて、普段は、持続可能な共生型社会のあり方や地域資源を活かしたまちづくりについて勉強しています。

瀧健太郎先生（46）の紹介で、毎日新聞記者 安部拓輝さん（40）から与謝野町での地域おこしの取り組みを聴く機会があり、関心を持ちました。そして、実践から学ぼうと、学生 4 人が 9 月 3 日から 3 日間、与謝野町の岩屋区で稲刈りなどのお手伝いをしました。岩屋区では過疎化が進む中で、移住者を増やすさまざまな取り組みが進められていました。

今回、私たちは「移住モニター」として岩屋区の魅力をタブロイド紙にしました。私たちの目線から見た岩屋区の魅力と課題を映し出してみたいと思います。

与謝野町

京都府北部の丹後半島の付け根にある。平成 18 年 3 月 1 日、加悦町・岩滝町・野田川町の合併により誕生した。主な産業として、農業、織物業（丹後ちりめん）などがある。

春は桜、夏は新緑、秋は黄金色の稲穂と紅葉などの彩りに包まれ、また、冬は多くの水鳥が水辺に集う。四季を通じて様々な景観を堪能できる地域。

平成 30 年 9 月末現在、総人口 21,882 人（男性：10,448 人、女性：11,434 人）、世帯数 9,130。

与謝野町 HP
http://www.town-yosano.jp

岩屋区

加悦谷の北西の隅で、西の兵庫県との境を源流部とする岩屋川が中央部を東流する。主要地方道宮津八鹿線（出石街道）が東の幾地へ走り、道路沿いに集落と耕地が連なる。地名の由来は仙ケ尾にある巨大な奇岩雲岩によると伝え、雲岩は文珠菩薩の乗ってきた雲が石になったものといわれる。

岩屋区 人口 1,131 人 世帯数 397（国勢調査 2015 年）。

引用）丹後の地名地理・歴史資料集：岩屋（いわや）京都府与謝郡与謝野町

乗って体験
農家の楽しさと厳しさ

１日目、最初に山﨑政巳区長（63）の農業のお手伝いとして、コンバインに乗って稲刈りをしました。コンバインを見たとき、私たち参加者４人全員がその大きさに驚きました。こんな大きいもの私たちに乗りこなせるだろうか…。そんな時「さぁ、誰が最初に乗りたい？」山﨑さんのやさしい声に不安が和らぎました。山﨑さんは乗り方を丁寧に教えてくれました。意外と誰でも乗りこなせるくらい操作は簡単でした。最初はつきっ切りで指導してくださった山﨑さん。途中からは遠くで見守るほどうまくなったみたいです。

運転に慣れたら、速度を上げたり、ゆっくりな速度で慎重に運転したり…。運転にそれぞれの個性が現れました。高速で運転する牧野さんに対し、「危なっかしかったけど、乗りこなせてるんよなぁ。おもろい子や」と山﨑さんも感心。田んぼを二枚刈り終えると「次は田植えを手伝ってほしいからまた来てな」とにっこり。また乗りたくなりました。

今回、私たちは稲刈りの仕事だからと、ホームセンターで長靴を買ってきたのですが、結局使いませんでした。山﨑さんは「今の農業はスニーカーでできるようになったんだ」と笑っていました。

三男の山﨑俊彦さん
来年から新規就農を考えています。

乗り方を教える山﨑政巳さん
途中からはおまかせ。笑顔で見守ってくれました。

刈り取りは手軽になりましたが、収穫した米はもみすり機にかけるためにトラックで運ばなくてはなりません。１袋は約 30kg。トラックまで運ぼうとしても一人で抱えられません。次男の直哉さん（34）は「きのうはこれを 99 袋運んだんやで」と笑っていました。やっぱり、農家はそう甘くない。

刈り取りを始めて２時間。地主の雲田幸男さん（82）が驚いた様子で訪ねてきました。田んぼの横を車で通りがかったら、女子大生がコンバインに。「こんなわきゃー子ら（若い子ら）が、ようううちの田んぼをやってくれた！　きょうは田んぼもさぞ喜んどるわ」。目を細めて喜ぶ姿に、私たちもつられて嬉しくなりました。

省力化が生む新たな課題

こんなふうに、農機のおかげで省力化は飛躍的に進みました。その代わり、昔ながらの共同作業はほとんど必要がなくなりました。田植えや稲刈りと作業の後のさなぼり（慰労会）、お互いの暮らしの中にあった共助の時間は、岩屋の集落に住む人たちのつながりを育んでいました。省力化が進んだ一方で、近所づきあいは薄れているそうです。

泉欽也副区長（60）は「隣組に入らない人が増え、地区の運動会にも参加しない家族も多くなった。農業の手間は省けて所得も増してはいるが、田舎では年老いてしまうと一人で生きていくのは難しい。それに気づいてもらうにはどうしたらいいのだろう」と話していました。

岩屋区では過疎化が進んでいます。2018 年 9 月、移住者を増やしていくために委員会を立ち上げ、子育て世代に気に入ってもらえる岩屋にしようと、さまざまな方法を模索し始めたところです。泉さんは「長年ここに住んでいる者には岩屋の良いところに気づけない。石ころでも景色でも空気でもいい。みなさんが感じたままを岩屋の人にも伝えてほしい」と私たちに言葉をかけてくれました。

山﨑さんの三男俊彦さん（29）は来年から新規就農を考えています。米に加え、田んぼを転用してナスとキャベツを収入の核にするのだそうです。農地はたくさんあっても、耕作をやめると荒れて害虫も増える。「うちの畑もやって欲しい」というお年寄りも多いそうです。「サラリーマンや公務員の平均年収と比べれば、あと 200 万円はほしい。いかにして年間の売り上げを確保するか」。俊彦さんは、これから５年間の就農研修の間に見通しをつけたいと考えています。

三枚おろしに挑戦

２日目、台風 24 号が襲来し、予定のプログラムを全部キャンセルして、避難所である岩屋地区公民館で待機することになりました。

前日に市場で買ったカンパチとアオリイカを公民館に持ってきていたので、俊彦さんにさばき方を教えてもらいました。そもそも私（中野）は生の魚を持ったこともありません。他のみんなもよく似たものです。大騒ぎしながら教わった通りに一生懸命さばきました。頭を落とす、皮をはぐ、力も要るし繊細さも要る作業でした。命に触れる恐ろしくも新しい体験ができました。

人生初の三枚おろしに苦戦

岩屋踊り、ふたたび

できあがったカンパチの刺身、アラ煮、アオリイカの刺身、煮つけなど。私たちでは食べきれません。そこで山﨑さんが次々に電話をかけ、急な呼びかけにも関わらず岩屋のまちづくりを担う皆さんが集まってくれました。岩屋区の伝統的な踊りを次世代に残そうとされている「岩屋踊り継承会（代表：梅田伸也さん（37））」のみなさん、空き家に囲炉裏を復活させた「雲岩庵」から地域活性化に取り組む雲岩創生塾のリーダー坂根義隆さん（42）、高齢者サービス「サポートい輪や」の永浜誠彦さん（71）。学生 4 人のために大人がたくさん集まってくれました。山﨑さんを中心に地域のみなさんがひとつにまとまっていることが分かります。あれだけたくさんあった料理がみるみるうちになくなっていく。おいしかったよと喜んでくれました。そしてお礼に、と岩屋踊りを披露してくれました。

岩屋踊りは地元の産業であるちりめんを織る動作をモチーフにしています。実際見てみると、生の太鼓や笛の音に合わせ、指先までぴったりそろった踊りは圧巻でした。実は岩屋踊りは一度途絶えていました。しかし、岩屋の若手が岩屋踊りの師匠に習い、踊りを復活させたのです。さらに、最近のアイドルグループの曲など今時の流行も取り入れて若者に受け入れられやすいよう、工夫されていました。なによりもみなさんが本当に楽しそうに踊っていたのがとても印象的でした。遠くから来た私たちを楽しませようといつもようといつもより無理して（？）たくさん踊ってくれたみたいです。本当に楽しかったです。３日間で一番盛り上がった時間でした。

岩屋踊り
　江戸中期に始まったとされる踊りで、丹後ちりめんの生産過程である、糸をよる動作や糸を巻き取る動作が踊りに取り入れられている。
　丹後の岩屋の地に江戸時代から伝わる岩屋踊りを継承し古き善き日本の伝統文化を衰退させないように岩屋踊り継承会などによる活動もみられる。
岩屋踊り継承会 Facebook
https://www.facebook.com/ 岩屋踊り継承会

雲岩公園のライトアップ（11 月）

雲岩庵でのチャレンジ

翌日には、坂根さんの案内で、雲岩公園を訪れました。雲岩創生塾のみなさんは、空き家になっていた「雲岩庵」をリノベーションし、地元の人や岩屋に訪れた人が集まれる場所にしようと活動しています。建物を案内してもらいながら、雲岩庵にまつわる歴史などたくさん聞かせてくれました。

雲岩庵に入り畳を上げると、囲炉裏の跡が。坂根さんらは「囲炉裏を囲んでみんなでお酒を飲んだり、おいしいものを食べるイベントができたら」と考え、再生に乗り出しました。

壁にハート型に切った黒板があり、思わずＳＮＳにあげたくなる可愛さでした。どれも足を運んでくれるひとを楽しませたい、また来てもらいたいというみなさんの思いがこもっていました。

雲岩庵の中、囲炉裏から見た風景

雲岩公園
「京都百景」「京都の自然 200 選」に選定されている。公園内は 4 月上旬から約 5000 本のミツバツツジが咲き誇る名所である。
公園頂上の雲岩（くもいわ）には、文殊菩薩を警護する毘沙門天が乗ってきた「雲」という伝説が残されている。閑寂で、累々とした奇岩で 1 つの山をなす。その岩上に雲岩寺跡がある。
また、春と秋には地元有志による「ライトアップ」も行なわれ、幻想的な空間を楽しむことができ、毎年多くの方が訪れている。
鎌倉時代を中心に繁栄した寺院跡で、山頂には丹後地方では最大の「宝篋印塔（ほうきょういんとう）」がある。現在では山全体が公園となっている。
雲岩創成塾 usj　Facebook
https://www.facebook.com/ungansouseijyuku/

すぐに来るんやでな ― 高齢化が進むまちでの支えあい

私たちが公民館で大騒ぎしながら魚をさばいていたとき、実は台風 24 号のため避難勧告が出されていました。その時、ひとりで公民館に避難していた松本道子さん（82）が私たちの様子を見に来てくれました。自宅の裏山が崩れかけていて、京都・大阪に住む子どもさん、お孫さんが心配して何度も電話をかけてくるので、しかたなく毎回ひとりで避難しているそうです。災害時にひとり暮らしの高齢者はなかなか避難せずに諦めてしまうことは社会的にも大きな問題になっています。

松本さんは私たちが魚をさばく様子を見て「懐かしい」とひと言。子どもたちが巣立ち、ご主人にも先立たれ、一人暮らしになってからは魚をさばくことがなくなったといいます。さばいた魚を家族で食べた時のことを思い出しながら、危なっかしい私たちを笑顔で見守ってくれました。

まだ雨は降っていましたが、避難勧告が解除されると、自分一人が区長や役場の職員を避難所にとどめているのは申し訳ないと、私たちの料理を食べることなく公民館をあとにしました。

松本さんの去り際、「ほんま来てくれてありがとう。気にせずいつでも来んさい。もう雨も止んでくると思うけど、裏山が音を立てるようなら、すぐに来るんやでな」と山﨑さんは声をかけていました。このように地域のみなさんが支えあって岩屋区の地域防災力は保たれています。

岩屋では高齢化が深刻な問題となっています。ガチャマンの機織り景気の時などピーク時には 2000 人が暮らしていましたが、サラリーマンとして都市部に働きに出るようになって人口は減り続け、今や 1150 人。65 歳以上の高齢化率は 43%。2016 年には岩屋小学校が休校になりました。

山﨑さんにお話を聞いていると、医療過疎の実情も見えてきました。病院は車で 40 分かかり、タクシーに乗ると薬代よりも高くなるなど、車を持たない高齢者にとって不便な環境です。しかし、この問題に取り組む高齢者センターの永浜誠彦さん（71）のお話は暗いものだけではなく、高齢者が集まってお茶できる高齢者カフェの運営など前向きな取り組みもいくつか私たちに聞かせてくれました。

ばら寿司

桃の端午の節句といった節目節目のお祝いや、お正月、お祭り、法事など、人がたくさん集まる日にこしらえる、目にも鮮やかなばらずし。

香川県や岡山県など、ばらずしを郷土料理として挙げる地域はいくつかありますが、サバの身を砂糖や醤油で味付けし、しっとり感を残す程度に炒めて作る「そぼろ」をちらすのはこのあたりだけ。また、京丹後市のばらずしがごはんや具を重ねて並べ、木へらで四角く切って取り分ける一方、与謝野町では、お皿のうえに寿司飯をよそい、そぼろや錦糸卵、椎茸の煮つけなどを散らしていただきます。ほかにも干瓢や筍、山菜など、季節や好みに合わせて具材を準備し、楽しめる一皿です。

そぼろを作る際、臭みと油を抜くために、市販のサバ缶をさっと湯引き、軽く絞って使います。おすすめは「焼きサバ」を使うこと。焼きサバは、串に刺したサバを網にのせて焼いた保存食で、余分な水分と油が抜けているため、いい塩梅のそぼろができるんだとか。

今のように交通網や電化製品が発達していなかった頃、海から離れた地域の人々は新鮮なサバを手に入れるのも、その鮮度を保つのも難しかったために生まれたそうです。

与謝野町町勢要覧より

丹後の郷土食「ばら寿司」と まちを支えるお母さん

ばらずし完成！
教えてくれた山﨑典子さんと

山﨑さんの妻典子さん（61）に丹後の郷土食「ばら寿司」の作り方を教わりました。こんなに色とりどりのお寿司をこれまでにみたことがありません。甘辛い鯖のおぼろの味がとても深く本当においしいです。

山﨑さんは 1 日目にとれた新米をばら寿司にして私たちに食べさせたかったようですが、「新米は水分が多い。米がべちゃべちゃになるであかんよ」と典子さんに提案を却下されました。

ばら寿司の作り方は各家庭で異なるようで、典子さんは調理中も「うちの旦那は甘めが好きやから砂糖を多めに入れるんよ」と言いながら多めの砂糖をフライパンに入れました。みんな自分の家のばら寿司が一番おいしいと思っているそうです。与謝野のお母さんの暖かさを感じました。

３日間、家を貸してくれた
衣川さんと試食会

お世話になった家の前で衣川さんと撮影
「若い子がのびのびと活動できるように手助けがしたいと思っている」

10 年先、50 年先を考えたい ー 衣川さんの思い

今回の 3 日間、私たちの滞在先は衣川光夫さん（76）の所有する空き家でした。トイレ、水回りも綺麗にリフォームされていてとても快適でした。もともとは親戚の家だったそうですが衣川さんが継いだものの、住む人がおらず、空き家になっています。日が暮れると山から涼しい風が下りてきて、まだまだ夏の暑さが残るのにとても心地よく過ごせました。衣川さんは「岩屋の若者が頑張っている姿を見て、自分も何かできないだろうかと思った」と話していました。

私たちが到着したとき、息子さんご夫婦が出迎えてくれました。そこに衣川さんはいません。夕方玄関にひょっこり顔を出してくれました。「来てくれてありがとう。ここのものは好きに使ってもらって構わんでな」と足早に去っていきました。山崎区長の呼びかけもあり、ようやく衣川さんのお話を伺えたのは滞在 3 日目でした。

私たちが作ったばら寿司を食べながら、衣川さんは少しずつ語り始めました。「ここ 1 年半で若い子らが岩屋でできることを実践しようとし始めた。変わりつつある。もう 75 歳をまわった。古い者がいろいろ言うと嫌がられるが、私は純粋に、若い子らがのびのびと活動できるように手助けがしたいと思っている」

自宅で織機を操る衣川さん。京丹後市峰山町出身で、結婚を機に岩屋に移住して 48 年。はじめは周りになかなか馴染めませんでした。「今も外の者の視点は持っている」。岩屋も変わらねばならないと感じてきたといいます。「3 か月先でなく常に 10 年先、50 年先を考えていかんと」と、岩屋の未来に向けた思いを語ってくれました。

岩屋には「空き屋」とされる住宅がいくつかあるそうです。離れて暮らす子供たちが母屋を引き継いだものの、壊そうと思っても何百万円もかかります。どうやって維持管理するか頭を悩ませるケースも少なくありません。

もっと知ってほしい、もっと話したい ー 山﨑区長のコトバ

私たちを暖かく受け入れてくれた山﨑区長。実は最初、私たち学生を受け入れるのは心配だったそうです。「つまらなさそうにしていたらどうしよう。でも興味を持ってもっと知りたいという思いをみんなから感じた。それでもっと知ってほしい、もっと話したいと思えたんや」と語ってくれました。

私たちは当初学生ならではの目線から、与謝野の“ええトコ”や“魅力”を見つけて、まちおこしに役立とうと考えていました。けれども、私たちの滞在するのはたったの３日です。思いつくことと言えばありきたりなことばかりです。

ただ、岩屋でお世話になったみなさんの話は岩屋の“ええトコ”にあふれ、笑顔で語るみなさんが岩屋の“魅力”そのものでした。外から来たひとたちの役割は、とにかく一生懸命に地域のみなさんの話に耳を傾けることなのかもしれません。そうすると、地域の“ええトコ”と“魅力”を自然と知ることができるのです。そして、こうやって紙面を通して多くの人と共有することができます。

故郷のために働きたい ー 松本さんの決意

3 日目、与謝野町役場商工振興課の松本潤也さん（39）から与謝野町の産業振興や移住・定住促進に向けた取り組みや課題を伺いました。

はじめはインターネットを通して与謝野の魅力を発信するところからはじめたそうです。確かに与謝野町のホームページを見てみると与謝野の美しい風景や素敵な特産物などが紹介されています。けれども、「みんなで一つになってまちおこしをするには、役場が外向けに発信するだけではなく、与謝野で暮らす自分たちこそがその魅力を感じ、発信できないといけない」。そう感じた松本さんは、毎日新聞社の力を借りて、与謝野のひとたちに与謝野の魅力を発信する「うちのまち」を始めました。

松本さんは、役場の職員として故郷のために働くことの素晴らしさを私たちに伝えてくれました。甲子園を目指して兵庫県の強豪校に進学、そのまま大学を卒業するまで与謝野を離れていました。就職活動中にメディア志望を転換して、「育ったまちで暮らす人を幸せにしたい」と与謝野町に戻りました。「前例踏襲よりも新たな挑戦を大切にしたい。みんながそうできればまちは変わる」と話す松本さんはかっこよかったです。

岩屋の魅力と課題 ー 私たちが感じたこと

今回「移住モニター」に参加した 4 人のそれぞれの率直な感想をそのままおとどけします。良いところから、田舎ならではの不便さ。これからの課題が見えてきた気がします。

中野 はるな

受け入れる側も不安と伺いましたが、私もインターン前はとても不安でした。事前学習で外の人は地域になかなか受け入れられない事例も知っていたので、岩屋で３日間もいて大丈夫だろうか、と正直とても心配していました。ですが、岩屋の人たちは私たちを温かく受け入れてくれました。山﨑さんは私たちに家族のように接してくれました。岩屋踊り継承会のみなさんは私たちのためだけにわざわざ浴衣の衣装に着替えて踊りを披露してくれました。嬉しいショックを受けています。

地元でうちのお母さんが「集会めんどくさいな」とつぶやく姿を見ることがあります。岩屋に来て、同じまちに住むひとがつながりがあって何かに一生懸命になるって素敵なことなんだと気づきました。初日にタオルを頭に巻いてコンバインに乗って「こういう道も楽しいな」と思いました。たくさんの人に「また来て欲しい」と言ってもらえたのが心にグサッときています。自分の居場所はこうやって作られるのでしょうか。

牧野 史奈

岩屋で過ごした３日間。みなさん本当に仲がいいと感じました。わたしのまちでは考えられません。山﨑さん一家はとても仲が良く温かい家庭でした。私たちのようなよそから来た学生にも、岩屋のことを伝えようと、とても親身に迎えてくれました。温かい気持ちになりました。岩屋踊りを見せてもらったり稲刈りを体験させてもらったり、魚をさばいて調理してばら寿司の作り方も教わりました。与謝野に来るまでに「かべ新聞」の練習のため、大学祭の紹介記事を書きました。だけど正直、書くことなくて大きな写真でごまかしました。けれど岩屋での３日間は書きたいことでいっぱいです。文章だけで埋められそうです。また岩屋に戻ってきたいです。

辻 真奈

大学に入って２年目、今の私はまだ大学を卒業して何をしたらいいか分からない。社会人としてどんな暮らし方があるんだろうと思いを巡らせていました。今回与謝野町の岩屋におじゃまして、みんながとても楽しそうに暮らしているのに驚きました。私たちだけしかいないのに岩屋踊り継承会のみなさんの真剣に踊る姿に、感動しました。私の実家は東近江市で、岩屋と同じように田舎だけど、こういう熱い集まりってあるんだろうかと思いました。私のまちでも「つながり」を探してみたいです。岩屋で三日過ごして、人の優しさ、温かさに触れて、住みたいと感じました。

けれどしばらく経って考えると、やはり実際に住みたいかと聞かれると自信をもって住みたいとまでは言えなくなりました。もっと交通の便が良く、仕事があれば、多くの人が移住に関して興味を持つかもしれない。普通は、今現在住んでいるところよりも不便なところに住みたいとは思えないはずです。

岩屋区のみなさんは本当に温かい。岩屋区の方言なのか、話し言葉の語尾のイントネーション、「～なんやねえ」。このイントネーションにも岩屋区の方の優しさを感じました。

けれど、いざ移住となるとやはり地理的な不便さがどうしても気になってしまいます。

内堀 桜花

岩屋で出会った人々はみんな温かく私たちを迎え入れてくれ、とてもうれしく、いい思い出がいっぱいできました。しかし、与謝野町のいい面ばかりではなく、高齢化が進む中で生じた課題も聞くことができました。“バスが一日４本しかない。薬代よりもタクシー代の方が高い”というお話に衝撃を受けました。家を貸してくださった衣川さんは「岩屋のいいところも悪いところも感じたことは、将来の岩屋のために全部教えてほしい」と話していました。正直なところ３日間の滞在は、初めてのことが多くただただ楽しかったです。そして、与謝野のいいところばかり実感するだけで終わってしまいました。今は岩屋のことをもっと知りたいと思っています。

与謝野のいつもを届けたい ー 小さな提案

岩屋のみなさんの暖かさに触れ、楽しい思い出ができた一方で、過疎化、高齢化、交通の不便さなどの課題も感じました。どうやって伝えるか悩みました。そんな中、東京から滋賀県北部の川合集落（長浜市木之本町）に移住した大久保有花さん（50 歳）にお話を伺うことができました。

東京に住む大久保さんは着物染織作家として独立する夢を持っていました。そんなあるときインターネットでふと目にとまった古民家の写真に一目ぼれしたそうです。山の水が家の中に引き込まれている水屋。私を呼んでいる。そこが空き家と知り、すぐにいざない湖北定住センターに連絡。現在、半月ごとに東京と長浜を往復しながら創作活動をしています。「最初は田舎の独特な雰囲気は何も考えておらず、あの水屋で仕事をしたい。もうそれしかありません。気づけば地域のみなさんに受け入れられていたと思います」と話す大久保さん。水屋では主に草木染めの作業をするそうです。植物を炊き出して染液を作り、その染液で糸を染めます。糸を染める時、洗う時に大量の水を使います。そのため、染め物をする人は水が豊富にあり、水質の良い場所にこだわります。塩素の入っている水道水よりも山の水を使ったほうが発色よく染まるそうです。でも、美しい山水が絶え間なく湧き続ける水屋は、大久保さんには奇跡の場所だったのです。ほとんどの人が水屋の写真を気にも止めないでしょう。しかし、ネット上の一枚の写真が、染織作家の大久保さんを川合にいざないました。一方で、どんなにスマートな情報発信をしても、そもそも移住を希望していないひとの気持ちを変え、そこに来てもらうのはやはり難しいと言います。都会の便利さに慣れた人たちが、岩屋の“不便さ”を目の当たりにすると普通は尻込みします。これは、私たちも感じたことです。

染めたエコバックを干す大久保さん

鮮やかに染まった糸
水船（右）には絶え間なく
湧き水が注がれる

けれど、大久保さんは移住しました。なぜでしょうか。大久保さんをはじめ、実際に移住に踏み切るひとたちの多くは、もともと移住に憧れを抱いていたのではないかと私たちは考えています。都会には日々の暮らしに疲れ、田舎暮らしを夢見るひとも多いと聞きます。古さや不便さを魅力と感じ、仕事がないこともチャンスと捉えるひとがいます。